

分有される植民暴力の記憶

－日本人ジャーナリストによる台湾先住民族の民族誌的記述－

中村 平

日本文化學報

第 39 輯

2008. 11

韓國日本文化學會

分有される植民暴力の記憶

－日本人ジャーナリストによる台湾先住民族の民族誌的記述－

中村 平*

(e-mail : husv83@gmail.com)

目 次

1. 問題提起
 2. 日本人が台湾先住民族の記憶を聞く、記憶と向き合うということ
 3. 日本人ジャーナリストにより分有される植民暴力の記憶
 4. 終わりに
-

1. 問題提起

いわゆる「日本人」である私は、人類学的フィールドワークを通して、タイヤルを中心とした台湾先住民族に出会い、日本による植民統治経験を聞き書きしてきた。かれらの私・日本人への語りかけに、どう応えていけばよいのかという問題意識が私を捉えて離さない。そしてこの私自身の問題は、現在日本人が台湾先住民族から和解が呼びかけられている状況において思考されるべきであろう。

台湾先住民族自身によって自己の歴史を模索し取り戻す試みが、1990年代から、シンポジウムや民族議会設置をめぐる動き等の公的な場において活性化している¹⁾。そこでは、

* 漢陽大学校 国際文化大学日本言語文化学科 専任講師。

日本学、文化人類学。

1) 例えば、民族の歴史を探求する以下のようなシンポジウムを参照。「エスニックグループ相互関係及びタイヤル族文化変遷」学術シンポジウム（2000年7月花蓮、内容は日本の「タロコ蕃討伐」について）、「民族古老馬紹・莫那（マサオ・モナ）をしのぶ：廖守臣先生記念」学術シンポジウム（2000年9月花蓮）、「国際学術シンポ：平埔エスニックグループと台湾社会」（2000年10月台北）、「布農族歴史文化」シンポジウム（2000年11月台北）、「タイヤル族エスニックグループ意識の形成とアイデンティティ、分裂」学術シンポジウム（2002年11月台北）。また2004年には、公共視台ドラマ「風の中の緋桜：霧社事件（風中緋桜：霧社事件）」（後援：文化建設委員会）が公開された。

日本人が呼びかけられてもいる。例えばシャツ・ナブ (Siyac Nabu) 口述・ワリス・ウカン (Walis Ukan) 訳注の、「非人の境遇——セデック民族が霧社事件を見る」²⁾をみよう。これは2000年10月21日台北にて行われた、「霧社事件七十周年国際学術シンポジウム」(台湾キリスト長老教会總會主催)で発表されたものである。

シャツ・ナブ氏はいわゆる霧社「蜂起蕃」のカツツ集落出身であり、1930年の霧社事件当時2歳で、母親の背中に負われて難を逃れた。セデック民族トゥキダヤ群(いわゆる「蜂起蕃」はこのうちの一部)の立場から、「台湾原住民族の『和解の祭』を行おう」という呼びかけをしている。霧社事件、第二霧社事件でお互いに殺しあったセデック民族のトゥキダヤ群、トダ群、タロコ群の3群だけでなく、その周辺のブルナワン(親愛)集落、タイヤル民族、ブヌン民族との間で和解の祭を行いたい。日本の代表と政府の代表を招き、お互いの肩を抱き合って、一つの手で共に一杯の酒を持ち、一つの心で酒を飲む。そうした彼我の分ない「和解の祭」の儀式を行おうと(同上:68)。

日本人はこの寛恕の呼びかけに、どう応えることができるのだろうか。この和解の儀式に参加する際には、本や映像や知人の話から断片的に聞きかじってきた日本植民史を想起せざるを得ないだろう。そして、自らが知りえない過去の事態を想像しようと必死になるのではないだろうか。日本人は、忘却してしまった「自らの」歴史に分け入っていくことによって、あるいは先住民と付き合うことによって図らずもその歴史と記憶に圧倒され、それを分有してしまうことの中で、台湾先住民族の呼びかけにこころうじて応えていけないのではないか³⁾。

台湾の植民地経験・戦争経験を語る先住民族の声に対して、日本政府を始めマジョリティ日本人は基本的に忘却し、それらをないものとしてきた。そこには、敗戦がトラウマとなり、戦後の経済成長を目指して新しい日本でやっていくという意識や、植民地と戦争の経験を「悪夢」として葬り去ってしまおうとする心理があったであろう。圧倒的忘却でないところでは、植民統治をおしすすめてきた側から、統治の成功が語られてきた。また現在に至るまで、日本植民主義の色彩を濃く残した形で、つまり自らの既存の主体を慰撫する形でナラシスティックに先住民族の声に向きあう動きが存在する。しかしそれと同時に、植民統治の忘却や、成功の物語に抗する歴史記述は日本の言論界にあって続けられてきた。本稿はその中でも、植民暴力(colonial violence)の記憶を分有してしまい、自らの既存の主体が動揺する様を描き、同時に現前させる「日本人」ジャーナリストのテキストを中心に台湾先住民族と日本双方の植民地・戦争経験を振り返る。

2) セデック語の題は、Niŋan ka dheran uka ka Sediŋ; Pecebu Sediŋ ka dTanah Tunux、中国語訳は、「非人的境遇——賽德克族看霧社事件」である。セデック民族は、2008年4月に中華民国政府により先住民民族としての認定を受けた。

3) 当事者すらも表象不可能な暴力の経験と記憶は、非当事者により理解すること(共有すること)は不可能である。そうした経験と記憶は、ただ部分的に分かち持たれるという意味で「分有」されるのみである。中村(2007)では岡真理(2000a)に依拠しつつ、暴力の記憶の分有を植民統治の影響の克服へ向けて主題化した。

台湾先住民族と出会い「日本人」を名指され、日本の所業に思いをはせ、日本人とは何か、台湾先住民族とは何かを同時に思考する著作が、日本側の言論においても連綿と続いてきている。そうした著作と著者は、台湾先住民族と日本が植民主義的でない形でつながる可能性を追い求めてきた。それらは、暴力に抑圧された声に対して「無能のままに応答しようとする」（岡 2000a）困難な試みであり、植民暴力の記憶を分有するものである。

日本において1990年代から歴史修正主義的な動きが台頭する現在、植民の歴史の忘却から歴史の積極的な書き換えという事態に至っている背景があり（高橋 2001）、本稿の主張はそれに介入する試みとなる。同時に、「日本人は～すべき」という倫理的命題を啓蒙的観念的に立ち上げずに、植民統治と戦争に対する応答責任を記述と語りの遂行的プロセスに設定するものとして、この問題を語る。以下で見るように、応答責任は具体的な顔を持った人々との交流にあって取られるものである。

2. 日本人が台湾先住民族の記憶を聞く、 記憶と向き合うということ

本稿は日本人ジャーナリストによる台湾先住民族の記憶の聞き書きを読んでいくが、それらは人類学的な意味において豊かな民族誌的記述（ethnographic writing）となっている。ここでは「民族誌」という言葉を、J.クリフォード（2002）にならい、自己と他者が様々な文化的差異や感情を持って出会う場を詳細に記述するものという意味で使用する。

観察し記述する者の自我の変容、日本人性の変容という点から台湾先住民族と日本人の関わりについての記述を考えよう。確固として見えた自己（もしくは日本人）の中に、他者の存在をどれだけ認めるようになったか、あるいは逆に、戦前・戦中と同じ「日本人」としての「一視同仁」を標榜しながら、戦後いかに旧植民地の「日本人」を忘却しようとしてきたのか。野田正彰『戦争と罪責』（1998）は、この点に示唆的である。

1944年生まれの野田正彰は精神科医を経て、比較文化精神医学を専攻する大学教員である。戦中派軍人と面接し、また彼らが残した文章の分析を通して、日本人の戦争（体験）との向き合いかた、もしくはその精神構造を検討している。日本軍と日本社会の、自他の悲痛に対し無感覚なさま（同上：207）、あるいは傷つく心（同上：213,316）の欠如を指摘する。戦後世代が、戦中派の父親たちが明確に言語化できなかった戦争体験に真摯に向かいきれなかった事態を、野田は、戦後世代に、父親の世代の経験を「聞きとる力」もしくは「聞く力」が欠如していたためとしている。他者や「相手の顔」を生き生きと「具体的に、詳細に」知る（同上：356）ことによって、他者にすこしだけ感情移入でき、自分の強張った精神に亀裂を入れることができるという。

他者を知る、他者の経験を聞きとる野田の指摘の重要性は、日本植民主義がもたらした以下のような認識からも明らかとなろう。宮本延人他八名による「高砂族の統治をめぐる座談会」（1954年）には、台湾の植民地統治を担った特権的日本人の典型的な考え方が示されていると考えられる。元「理蕃課長」と人類学者が、日本の理蕃政策を他西洋諸国の植民地政策と比較し積極的評価を加えている⁴⁾。台北帝大土俗人種学教室に学んだ馬淵東一。「兎に角、よくいえば親切、悪くいえばおせっかいに過ぎるというのが台湾の理蕃政策についての感想」であり、政策は初等教育には熱心で、就学率アップのためにたいへんな努力を惜しまなかった。「うるさ過ぎても暖かみが」あり、特に欧米の植民統治と比較すると「成績がよかった方だ」（同上：190）。鈴木秀夫（元総督府理蕃課長）は、「私は台湾の高砂族は生きた天然記念物だという気がする。しかし、いくら愛すべき風俗習慣をもっているからといって、無智のままにそれをおいておくわけにはいかない。生活も高め教育も進めなければならない」（同上：188）。

終戦の9年後に行われた座談会は、こうした日本の植民統治への肯定で終わっている。ここにおいて評価されるのは日本的「近代化」の成績を気にする思考であり、野田の言うような、植民暴力がもたらした悲しみや痛みを考えていこうとする姿勢は見られない。植民暴力はここにおいて既に忘却され始めている⁵⁾。

こうした植民世代の継続する認識の一方で、日本政府は1956年、『経済白書』で「もはや戦後ではない」と宣言し、朝鮮戦争の「特需」などの背景により高度経済成長に突き進んでいった。資本主義的「近代化」にまい進することが、日本人に植民の歴史を忘却する要因であったといえる（高橋 1999）。

しかし同時に、漢族系台湾人による日本に対する戦争補償責任の追及は、戦後ずっと鋭くなされてきた。台湾人によるものとしては林景明（1970； 1973； 1997）、高山輝男（郭幸裕）『「天皇の赤子」たちは、いま』（1985）、基佐江里編『旧台湾出身日本兵秘録 聞け！血涙の叫び』（1986）、廖木全「生死を共にした私たちへの差別」（1992）、李憲章「戦後の悲劇を他人事のように眺めてきた日本国の責任は、どこまでも

4) 参加者8名は、平沢亀一郎（元総督府理蕃課技師）、井上伊之助（元山地伝道者、医師）、佐山融吉（元蕃族調査会補助委員）、瀬川孝吉（元総督府理蕃課のちに同農務課勤務）、鈴木秀夫、横尾広輔（元総督府理蕃課視学官）、馬淵東一、宮本延人（元台北帝大土俗人種学教室講師）。各発言については、戴國輝（1981）による詳細な批判を参照。

5) ここで付記しておきたいのが、土橋和典（1928年台湾生まれ）の『忠烈拔群・台湾 高砂義勇兵の奮戦』（1994）や、門脇朝秀（1914年朝鮮生まれ）と彼の主催する「あけぼの会」による『台湾高砂義勇隊：その心には今もなお日本が、、、』（1994）に代表されるような著作である。おそらく広義に日本における戦友会関連出版物、戦記ものに連なるこの著作は、台湾先住民族が日本のためによく戦ってくれた、尽くしてくれたというトーンに基本的に彩られるものである。植民者の心性に強く色づけられているこうした著作においては、暴力の記憶の分有がなされるというよりは、今現在のために犠牲になった人々の追悼に力点がある。「日本人」の既存の主体はそこで安定化に向かっている。またこれらは、後述の戴國輝による批判の対象となろう。

重い」(1995)、簡茂松『俺は日本兵』(浜崎 2000)、林水木『戦犯に囚われた植民地兵の叫び』がある。どれも、力強く直截な言葉による日本の戦争責任の追究と指弾の書である。日本政府と主流社会の無関心な対応は、漢族系台湾人のこうした厳しい糾弾を引き起こしてきた。

35年の植民統治の時間を経た後に台湾先住民族によって引き起こされた大きな事件が、1930年の霧社事件である。統治側の言説が出版される一方、霧社事件の生き残りのアウイヘッパハ口述(許介麟・林光明解説)の『証言霧社事件——台湾山地人の抗日蜂起』(1985)、同じく生き残りのピホワリス(高永清)『霧社緋桜の狂い咲き——虐殺事件生き残りの証言』(1988)が事件を先住民族側から描いている⁶⁾。

戦争補償についての日本人による応答としては、1975年結成の「台湾人元日本兵の補償問題を考える会」による裁判支援があった⁷⁾。1977年の地裁提訴から、1992年の最高裁による補償請求棄却までの経緯がある(木村 2001、台湾人元日本兵士の補償問題を考える会編 1993)。また漢族系台湾人の戦争補償責任の追及は、鈴木明(1974ab; 1977)、福永美知子『心果つるまで：日本に戦犯にされた四人の台湾のお友だち』(2002 [1995])などの著作で取り上げられてきた。

こうした中、1970年代になされた戴國輝の日本人に対する批判は、まだその有効性を持っている。戴は1931年「中国台湾省」生まれで(祖籍は広東省梅県、著者による)、1955年から日本に住み大学教員などを歴任した。なぜ武力制圧によって鎮圧された台湾先住民族が高砂義勇隊として日本のために戦い、戦わざるをえず、いまなお日本精神を語り、日本人の心のオアシスとなっている(されている)のか。それを徹底的に思考しない限り、日本は台湾先住民に対する日本の近代を直視しえたことにならないというのだ(戴 1979)。霧社蜂起事件研究とは過去の研究ではなく今日の問題を研究することであり、日本人の「義務」であり、「高山族」に同情してかれらを「救う」ことよりも、日本人「自らを救う」ことにつながるほうが緊急課題であるとした(戴 1981、初出1973)。

1935年台湾で生まれ、1946年に日本に引揚げた加藤邦彦の『一視同仁の果て台湾人元軍属の境遇』(1979)は、台湾人元軍属の戦争経験、高砂族の志願兵、霧社事件、皇民化政策、日本で働いた台湾人少年工、日本に帰化した軍属、靖国神社の対応を取り上げる。1978年7月2日に第二のスニョン(中村輝夫)事件が発生した。苗栗出身の曹輝楽さんが終戦後もフィリピンに住み続け、35年ぶりに台湾に帰国したという事件である。しかしこの事件は日本では報道されず、まったく注目されない(同上：80-3)。

6) 本稿は、植民側の日本人がいかに被植民側の経験を想像してきたかに焦点を当て、これらの分析は別の機会に行いたい。また「台湾人」民間研究者による霧社近辺の日本植民史に関する著作としては、鄧相揚(2000a, b; 2001)を参照。

7) 同会は、1974年にインドネシアのモロタイ島で台湾先住民族アミの「中村輝夫」(アミ名・スニョン)日本兵(陸軍一等兵)が「発見」され、その際の日本政府の対応をめぐる結成された。

エピソードにおいては、「タイヤール族」7名（新潟県五峰郷桃山村村長ら）の靖国神社訪問をとりあげる。「戦死した夫や兄弟の魂を返してほしい」という切実な訴えは、神社の職員にまじめに取り上げてもらえず、追い払われた⁸⁾。

林えいだいは1933年福岡県生まれのノンフィクション作家で、精力的に霧社事件と高砂義勇隊の真相を明らかにしようとしている。BC級戦犯、松代大本営、朝鮮人強制連行、オランダ人強制収容所などに関する著作があり、1994年から高砂義勇隊の取材を始める（1995: はじめに）。霧社事件、高砂義勇隊をはじめとして、植民地の生活を伝えるさまざまな写真を収録した『写真記録台湾植民地統治史：山地原住民と霧社事件・高砂義勇隊』（1995）を出版した。

『証言台湾高砂義勇隊』（1998）では、第一回から七回までの高砂義勇隊を、12人の隊員の証言から浮かび上がらせている。『台湾の大和魂』（2000）は、二人の高砂義勇隊員の声が描かれ、隊員の目からみた戦闘状況の詳細な描写を行う。高砂義勇隊の非情さと冷徹さを語るものはこれまでにほとんどなかったが、ニューギニアで終戦後に高砂義勇隊員に命乞いをする日本人将校の描写は目を引く（同上：76）。ここでは「大和魂」と日本人らしさをめぐる、日本人と高砂族の間に逆転状況がおきている。

日本のマスコミ報道は、李光輝氏（スニヨン、中村輝夫）が「発見」されたとき、32年間という時間の長さに驚きを示したばかりで、彼が何故逃亡兵の烙印を押され、モロタイ島で生きなければならなかったかのの本質を伝えなかった（同上：1）。彼ら老兵たちが「われわれ日本人」に問いかけていることは何か、その燃えるような瞳に、日本人と政府はしかと答えなければならないのだ（同上：286）、と林は述べる⁹⁾。

8) 「厳として存在した歴史的事実、やがて風化し埋もれて、支配者にとって都合のよい断層を形成するであろう。断層の中に閉じ込められてしまったうめきは空中撮影によっては探査できない。地下水のように浸み入って、その表土を洗い流してみても、はじめて露わになる。露わとなった断層の中には累々たる白骨が横たわっていた。私は一体、一体洗骨改葬するような思いでこの一文を書き始めた」（同上：261）。

9) （元高砂義勇隊員たちは）日本人が来ていることを知ると、山を越えて訪ねてくる。何十年ぶりかで日本人と話せて懐かしいといって、夜が明けるまで私に向かって戦争体験を語るのだった。／「あなたたちはどうしてそんなに優しいんですか？　ほんとに日本に恨みはないのですか？」／と、つい私はたずねてしまう。／「どうしておまえはそんな馬鹿な質問をするんだ。日本に恨みなんか持つわけがないじゃないか。われわれは志願して戦争に行ったんだ。日本人と同等に扱ってもらったんだ。軍人になることが高砂族の青年の誇りだった」／と彼らの一人は答える。（中略）「大和魂は台湾にある」／と叫ぶのは、三十年前、天皇に建白書を書いて皇居に飛び込んだ老人だ。天皇誕生日だったため、精神異常者扱いされて釈放、この事件は報道されなかった。／戦争によって大きな犠牲を払いながら、日本国から棄てられても、今なお大和魂を叫ぶ台湾人の心とは何なのか。（中略）（彼らは）内心では日本政府の戦後処理について、激しい怒りを持っているのだ。／一緒に酒を飲む機会があるが、彼らは酔っ払うと激しい口調で日本政府を批判する。／「日本政府は、俺たちが死ぬのを待っているのか、許せない！」／とつい本音が出る。台湾人は、口では日本人は懐かしいといいながら、本心では日本政府のやり方は許せないという気持は強い。／私が何故台湾人と朝鮮人の皇軍兵士にこだわるのか。その理由は、天皇の軍隊だった彼らが、日本政府によって利用されたあげく、今日まで棄民され続けているからにほかならない。／彼らは日本軍人・軍属として戦場に狩り出され、命をかけて戦ってきた。にもかかわらず戦後、サンフランシスコ講和条約によって、日本国籍ではなくなったということで、日本政府は棄民してきた。確定債務を今に至るまでないかしろ

『台湾秘話霧社の反乱・民衆側の証言』（2002）で、林は霧社事件に切り込んだ。霧社事件との出会いは、1990年に行った旧満州・関東軍の七三一部隊と特務機関についての調査からである。日本統治下の台湾で小学校教員をしていた方の紹介で、下山一氏（林光明、霧社の日本人警察とタイヤル女性の間に生まれた）やオビン・タダオ氏（花岡二郎の妻、高彩雲）を紹介してもらい、文通を始めた。霧社事件の生存者の話を聞き、事件の「真相」を「解明」（同上：7）するために訪台する。

17歳でモーナ・ルーダオと共に日本人を襲い、高砂義勇隊にも赴いたバワンナウイの言葉。「おまえにいうとくが、この清流では高砂義勇隊と特別志願兵の話は聞けるだろうが、こと霧社事件に関しては誰も話はしないよ。もう忘れたいんだ。日本人をどれほど恨んでいるか、恨みの気持ちは百年経っても消えることはなかろうよ。もう絶対に来ないでくれ！」／それを聞くと、私は頭をがんと打ちすえられたような強い衝撃を受けて、目の前が真っ暗になった。ただ興味を持って台湾にやってきただけではすまされないの、加害者としての日本人の心を問われていると思った。（中略）筆談による林光明（下山一）の言葉は以下だ。「台湾に来て霧社事件を調べる日本人はせっかちで、旅行ついでに霧社にくる人が多いんです。半端な気持ちなら、私だって何も話す気にはなりませんよ」（中略）「あなたが本気で取り組むなら、すべてを話します。もう私も先が見えているから、日本人のあなたが霧社事件の真実を後世に伝えてください」／林光明の切ない気持ちがひしひしと伝わってきた（同上：7-9）。

1932年生まれ作家、早乙女勝元による『台湾からの手紙 霧社事件・サヨンの旅から』（1996）は、自らのフィールドワークと史料により霧社事件とサヨンの事件を追ったものである。早乙女は2002年に東京にオープンした「東京大空襲・戦災資料センター」の館長を務めている。「南京」「重慶」「ハルビン」「延安」と共に、「母と子でみるシリーズ」として「過去の日本の侵略の実態を告発」するものとして編まれた著作である。

中村勝「マラカム！高峰の焼畑・狩猟民」（1996、中村2003所収）による問題提起は、植民（地）主義に関わるテーマを、日本資本主義の発達・浸透とかかわらせて論じる視角を打ち出している。中村は1944年東京生まれて大学教員を歴任し、1995年に一年強を

にしてきた、日本政府の責任が問われている。台湾に対する確定債務とは、日本人が台湾人に対して負っているもので、それを半世紀以上も放っておいたこと自体が、人道上許せないのである。／（中略）私は台湾で取材する中で、日本政府に対する彼らの怒りが爆発寸前にまできていたことを知っていた。（1996年の交流協会襲撃の）新聞の記事を読んで、とうとうやったかという思いだった。／「われわれにとって、（弔慰金の換算率である）百二十倍が問題じゃない。これまで五十年間放置してきた、日本政府の無責任さをいっているんだ。まず政府が謝罪することじゃないのか」（高聡義さん）。／（中略）日本軍人になることを誇りに思い、今なお大和魂とか日本精神を説く彼らの前に私は言葉を失った。台湾の中に突然日本が現れてとどつてしまう。まるで過去の日本の亡霊をみるような気がして、その純粋な気持ちが哀れにさえ思えてくる。／老兵は消えていくのみであろうか。それでは戦死した台湾人は犬死になる。せめて戦争犠牲者に償いをするのが、人間としての道ではなかろうか（同上：4-10、スラッシュは原書での改行を示す）。

台湾で調査した。中村の視角は、霧社事件後の河上丈太郎¹⁰⁾と河野密¹¹⁾ (1931)、戦後の山辺健太郎 (1971)、ねず・まさし (1970, 1997)、朴慶植 (1971) らの日本資本主義と帝国主義批判を深化させたものと言える。戴國輝の問題提起に対するひとつの重要な解答になっている。

中村は、自らの父親がかかわり、傷ついた戦争と戦争責任の問題から出発し、その解明を明治以降の「近代化」の歴史に求める。日本資本主義が「発達」してきた歴史は、その裏に被植民者がこうむった暴力の歴史をあわせもつ。中村は、日本資本主義「発達」の歴史を、勝者ではなく傷ついた者たちからの視点からとらえ返そうとする。勝者である日本人が認識する歴史は、被植民者の認識からかけ離れたものである可能性があるからだ¹²⁾。

中村は近著『「愛国」と「他者」』 (2006) において、父親を台湾先住民族に殺害されたキリスト教「生活伝道者」井上伊之助と、東京大学総理で「道德進化論」を主張した加藤弘之を対比し、先住民族を含めた「台湾人」と日本人の精神的脱植民化の道程を模索した。1874年の「台湾出兵」、日清戦争後期から始まる統治初期台湾住民の「討伐」、「理蕃五箇年事業」といった「暴虐」はその思想的背景のひとつを加藤の「愛国」論に求めることができるが、井上や須田清基といった日本人生活伝道者は、台湾先住民／日本人という自他を同時に「生きられる」生と生活実践を貫いた。植民化に抗する実践に肉薄する研究といえる¹³⁾。

10) 1889-1965年。1928年より、当時合法的社会主義政党であった日本労農党の代議士を務め、戦後は日本社会党委員長を歴任。

11) 1897-1981年。日本労農党員、戦後は日本社会党員を歴任。

12) 「筆者があえてこうした台湾近現代史研究にむかった理由は、筆者なりに日本の戦争責任のあり方を自問するところにある。一九三七年中日戦争下、一二月の『南京総攻撃』に加担した、父親の苦悩の戦後史。『平成』改元時にその意味があらためて問われた、集団への忠誠という日本天皇制のあり方と、企業への忠誠という戦後日本資本主義の社会的風土との関係。(中略)そうした筆者の戦後昭和史の問題意識は、くり返すように明治維新後の近代化とともにあった。アジアの周辺社会に対する破壊的な戦争行為の歴史的意味を、自分の追体験として問い直す作業にむすびついていく。」「日本人として小さな負い目を覚えながらも、日本(与那国島)から最も近いこの国のひとびととおこなう共同作業は、破壊的な日本資本主義の犠牲となったものの消されてはならない歴史を再興することである」(2003: 59-60)と基本姿勢が述べられている。本論文を基にした中村勝・洪金珠著、チュフス・ラワ口述『山深く情は揺れる——タイヤル族女性チュフス・ラワの一生』(1997、中国語)は、「アタヤル」(タイヤル)の高齢者女性のライフ・ヒストリーから、タイヤルの社会経済生活と、それに対し多大な影響を与えた日本植民地政策の歴史を描写する試みである。洪は1960年台北生れの漢族系台湾人である。チュフスの物語は、「タイヤル族—日本民族—中国民族—台湾民族」の狭間にあって生を求めるような民族アイデンティティを思考する際に、最も素晴らしい「事例」になっているとする(同上: 5-6)。この言葉遣いに見られるように、中村が学び取ってきた社会科学的学問のあり方は、対象を理論的名辞の中に位置づけ、意味づける傾向が強い。この姿勢は、第三節に見る受動的な暴力の記憶の分有とは若干の温度差を有する。理論的名辞(あるいは概括用語)についてはモートン(2005: 62)、富山(2002)を参照。

13) この他、傅琪貽^{フチイ}(2006)、北村嘉恵(2008)により台湾先住民族の蒙った暴力の経験に肉薄する重要な研

1952年生まれの写真ジャーナリスト伊藤孝司は『棄てられた皇軍：朝鮮・台湾の軍人・軍属たち』（1995）という写真集を出版した。反核、韓国・朝鮮人被爆者、樺太での韓国・朝鮮人、在韓日本女性、長良川、「従軍慰安婦」、アジアの戦争被害者をテーマに写真展を開いてきた。韓国7回・朝鮮1回（取材者63人）、台湾4回（79人）を訪問・取材した。「被害者たち」と出会った「私は、写真家・ジャーナリストとしてだけではなく、日本人として何をすべきなのか、何ができるのかと絶えず問い詰められている」。そうした出会いを通じて、「大きな重荷」を背負い込んで日本に戻って来る（同上：125）と述べている。

以上の著者たちは、自らが日本人であることと植民統治・戦争責任を出発点において明確にを自覚し、旧植民地の人々にその責任を取るために調査や聞き取りを行ってきた。一方、それにかかなり近接した位置にありながら、若干異なる位置から台湾先住民族と日本人の関係についての記述を行ってきた書き手がいる。台湾先住民族に出会い歴史の重みを知らされ、日本人性とその責任に「図らず」出会ってしまう¹⁴⁾。そんなに自覚していなかった、自分が日本人であることとその責任を図らずも引き受けさせられてしまう所に大きな力のベクトルを持った書き手たちである。それは受動的な体験である。そしてその受動的体験を、書くことにより別の人へと開いてゆく。するとそれは既に、能動的な行為と呼ぶものになる。以上の著者たちにおいて、「資本主義批判」や「植民統治責任、戦争・戦後責任を取る」といった能動性が探求の出発点において強いとするならば、以下の書き手たちには、出会いにより主体が構築されていくという側面が強く見られ、主体変容の受動性が濃く打ち出されているといえる¹⁵⁾。それは、被植民者が蒙った暴力を、明確に定義することはできないかもしれないが、自らの神経系があらわになって感知する事態なのだ。この暴力はさらに、被植民者が蒙ったというだけでなく、植民者が自ら発動し自ら巻き込まれていったものでもある。

これから紹介するテキストは、日本人が台湾先住民族の歴史的な傷や傷あとを前提として探求に赴くというよりは、若干の問題意識を持ち現場に向かった者たちが、深刻な歴史の傷や傷あとに図らずも出会ってしまう中で、書かれている。言葉の元来の意味における「メディア＝媒体」に自らが生成し、聞いてしまった記憶を別の人に伝達しようとする。次節で詳説する、大田君江・中川静子、佐藤愛子、石橋孝、柳本通彦といった書き手に顕著

究がなされている。暴力の記憶の分有とこれらの歴史学諸研究のすり合わせについては、別に論じたい。

14) 「日本人とは何か」という問いは、他者からの呼びかけに答えようとするところに生まれる。港道隆はそれを、「自分が他者に呼びかけられるか否かを自由に選択することはできない。しかし自分がそれを認知しない限り、責任は場を持つことがなく、責任ある応答はされない。呼びかけは他者と自分の間に関係を設定する」（港道 1994: 257）と述べている。

15) 中野敏男はこれを別の言葉で、「実際に応答する以前に「主体」が求められるとき、そのこと自体によってすでに、応答によって反省と自己変革が進むということが拒否され、それゆえ実質的な応答そのものが拒否されてしまう」（中野 2001: 307）と述べている。

である。ここでは、近似した位置にいる別の書き手の「日本」との関わり認識に、もう少し触れておきたい。

中川浩一・和歌森民男『霧社事件：台湾高砂族の蜂起』（1980）は、卒業論文作成に当たった中村玲子の祖父の「蕃地」体験という「ルーツの探索欲」（同上：202）を追うところから始まる。霧社事件の生き残りの高永清との話から、「贖罪の気持をこめて、霧社事件の実相を明らかにしなくてはならないと私たちが決意した」（同上：213）とする。産経新聞台北支局長を務める川崎真澄（1959年生まれ）は、『還ってきた台湾人日本兵』（2003）を著した。国籍条項により日本人と同等の戦争補償を受けられなかった台湾人日本兵を取材する中で、「日本人とはいったい、何者なのか」（同上：22）という問いに突き当たらざるを得なかった。

池田士郎（1946年生まれ）は1980年代前半から、台湾先住民族のアミの人たち、特に高砂義勇隊として日本のために南洋で戦った人たちの話を聞き書きしてきた。大江健三郎『沖縄ノート』（1970）において頻繁に繰り返される、「このような日本人でないところの日本人へとかえることはできないか」を引きながら、「戦後、半世紀以上も語る機会を奪われていた人々の語りに耳を傾けることは、日本人としての私の義務ではないだろうか」

（池田 2004：182）としている。大江の言う「このような日本人でないところの日本人へとかえること」は、「帰る」でもあり「変える」でもあるだろう。日本人は、植民地において、あるいは植民地をめぐる、植民される人々と自分を差異化しながら、自らを創ってきた。このような日本人でないところの日本人へと、「かえる」ことはできないのだろうか。自己成型の経路を辿り直し、これまでと違った自分の可能性を再発見するようなこうした探求を、端的に「遡行」といってよいだろう（中村 2007を参照）。本稿は、遡行を遂行する民族誌的な記述に注目していくが、それらは台湾先住民族の民族誌的記述にあっても行われてきた。

意図せざる、もしくは実際の人との交流を通じて形づくられてゆく、自己の変化しつつある日本人性が、こうした書き手に表れている。そして遡行においては、明確な言葉で語られるある程度確定した「歴史」よりも、トラウマ的な「記憶」が前景化される。

岡真理の『記憶／物語』（2000a）は、記憶の「分有」という事態に注意を促す。人が記憶を領有するのではなく、「＜出来事＞が人を領有する」（同上：78）。「＜出来事＞の記憶を分有するという営為とは、この他者の呼びかけの声にその無能さと受動性において応答するものにほかならない」（同上：98）。

他者の声に応答することについて、岡はこう述べている。パレスチナの作家、ガッサン・カナファニー（1936-1972年）の小説は、「言葉という権力を用いて他者を表象し私たち自身の主体的ポジションを確認するという構図」、それ自体が転倒される可能性を持っている点で、パレスチナ人の経験に対する応答の実践である。テキストそれ自体の中に、主体位置と既存の権力関係の転倒の契機が書き込まれていなくてはならない。記述の主体自身が、実は呼びかけられたものであること、そして、呼びかけたものに対する応答それ自体

の不可能性が、テキストに書き込まれていなくてはならない（岡 2000b: 256）。

本稿が探求する植民暴力の記憶は、日本人に対して「加害の意識を持ちなさい」と「啓蒙」することにより、分有されるものでは決してない。暴力の記憶は岡が言うように、意識し頑張って表象／理解しようとしてもそれを超えたものとして、意図せざる形で人に到来する。植民統治責任、戦争責任を思考する際には、暴力の記憶が到来する、具体的な出会いを通して自己と他者の関係に注目することが大切になる。具体的な出会いには、人類的「フィールドワーク」で物理的に出会うことだけでなく、記述を通しての出会いが含まれよう。次節では、台湾先住民族の植民暴力の記憶を分有してしまっている日本人ジャーナリストの民族誌的テキストを読み直していく。それらのテキストは、台湾先住民族の植民暴力の記憶について日本主流社会の忘却の潮流に、結果的に抗してきているのである。

3. 日本人ジャーナリストにより分有される植民暴力の記憶

大田君江・中川静子（中村ふじゑ）

大田君江・中川静子「霧社を訪ねて」（1969）は、1963年に霧社を訪問し、霧社事件の生存者・高愛徳氏の証言を詳細に聞きとる。中川は1934年生まれで、後に中村ふじゑと名前を変えた。「私は、あんたたちが日本人だから、いろいろ言いたいんだ。この事件を知ることは、日本の将来のために必ず役に立つ」（同上：246、ページ数は1981のもの）と高氏は言う。「霧社への旅は、私たちに大きな課題を投げかけたのであった」

（同上：251）としている。この文章はカットされた部分を補完して、中川静子『日本帝国主義下の台湾霧社事件』（1970）として出版された。日中友好協会のパンフレットとして出版された本書は霧社事件と題されたものではあるが、自分の「台湾との出会い」という書き出して始められ、自己の立ち位置を意識したものである。

中川は敗戦時に知り合いの「台湾のおにいちゃん」が家族と共に台湾に帰り、日本人の「おにいちゃん」の家族が台湾から引き揚げてきたことから、「ばく然と」日本と台湾が「特殊な関係」にあったことを知る。「六〇年安保」闘争の連日のデモに参加したものの、虚脱感が残る。そんな中、「外国旅行でもしてみようじゃないか」と友人と考えて、1961年から62年の六ヶ月間、台湾を訪れた。台湾に行くと言うと、周囲の友人から「中国人民に対するウラギリ行為」と思われたことに違和感をもった。日本では「人民的な立場からの台湾へのアプローチはなされていなかった」（中川 1970: 52）としている。

「幼くして終戦をむかえた私」には戦争責任は関係のないことだと考えていた。しかし台湾に来て、「私の父は太平洋戦争の時、日本軍に従軍して戦死した」「日本時代に抗日運動をしたために、捕えられ、拷問をうけ、そのきずあとがいまだに身体にやきついている

人を私は知っている」といった声に出会いはじめる。「私たちは、日本の犯した罪と真正面から向かいあうことになった」（同上：3）。

1962年3月、気になっていた霧社事件について「現地の人たちから直接」話を聞くため、そして蜂起に参加した人たちの次世代が事件をどう受けとめているかを知るため、霧社に向かった。中川の文章では、霧社で出会った下山豊子氏の描写と、事件に関する研究書の整理とが交互に重なり合う。下山豊子氏は、事件当時霧社分室主任で殺された佐塚愛祐警部補の娘で、下山宏氏と結婚していた。下山豊子氏の母親はタイヤル女性ヤワイ・タイモである。また下山宏氏は、タイヤル女性ピッコ・タウレハを母とし、父は日本人警官・下山治平である（詳しくは、中村ふじゑ 2000を参照）。

中川は、日本に帰国後、下山豊子氏の姉で、ヤワイ・タイモ氏の長女である下山佐和子氏を訪問した。佐和子さんは、霧社事件後、台中の女学校を出て日本の音楽学校へ進み、やがて歌手となって台湾に講演に来ることになった。その時ヤワイ・タイモ氏は、娘に「はずかしい思いをさせないように」と、台北帝大附属病院で手術を受け、額の入れ墨をとりさったという（中川 1970: 35）。また、他にも好きな人がいたという母ヤワイ・タイモと父・佐塚警部の結婚について、佐和子氏はこう語る。「母は、父をよろこばせることに一生懸命だったわ。父をよろこばすことは、日本人全体をよろこばすことで、日本人がよろこべば、それで山の人はしあわせになると信じてね。ですから父を怒らすことを非常に恐れていた。母はいつも、自分の結婚の意味をかみしめて生活していましたね」（同上：37）。

霧社で中川は、ダックス・ナウイ（改姓名・花岡二郎、霧社事件で自殺）の妻であった、事件の生き残りの「初子さん」（オビン・タダオ）に出会う。後に、中村ふじゑ『タイヤルの森をゆるがせた台湾・霧社事件：オビンの伝言』（2000）の主人公となるオビンとの、最初の出会いだ。中川は、初子さんや、霧社の人々と出会う中で、高砂義勇隊への志願について次のような認識を深める。「起ちあがつては押しつぶされ、起ちあがつては押しつぶされ、ついに自分たちの抵抗がむだだと悟ったとき、高山族は体制のなかで人一倍働くことによつて、自己の存在を強調しようとしたのではなかつたらうか」（中川 1970: 24）。

霧社事件の生き残りが集められた川中島（霧社から直線で約15キロ）に赴いた中川らは、決起時に決起集落の少年だった高愛徳氏に会う。山地警察の横暴さ、頭目モーナ・ルーダオの内地（日本）観光の話、事件前に密に行われていた集まりの話、「ここ（決起：中村注）まで来るのに五年かかった」という高氏の父（事件で死亡）の話、事件当日、運動会会場で太鼓係をしていた高氏が目撃した惨状。「このとき忘れられない二つの場面がある」という。

「逃げようとする日本人の警官が、自分を攻撃してくる相手が友だちと気づいたらしい。きつと、かつて討伐にいつしよに出たことでもあつたんでしよう。手で顔をふせいで、『撃つな、撃つな！』と叫んでいる。すると、その友だちが『友だちだからこそ、いま、おまえを撃つんだ。こう

なつたのも日本の罪、だから、おれがおまえを撃つ』と、どなりながら、名前を叫んで、『動くな！ 一発で殺すぞ！』と発射したんだ」。

「もう一つの場面では、師の恩というものを知りましたよ。十五歳ぐらいの高等学校の卒業生だったが、ねらつた相手が梶原先生とわかつて、どうしても撃てない。すると、となりにいた年上の者が、『なぜ撃たなかつた！』と彼をなぐつた。そうしたら、その子は『撃てない、撃てない』と泣きながら言っていた」（同上：44）。中川は、別れ際に高氏にこう言っている。「私たちは、日本へ帰ったら、できるだけ多くの人に霧社事件について伝えたと約束した」（同上：50）。

以上は1970年の文章だが、それから30年後の2000年に中川は、中村ふじゑ名により『タイヤルの森をゆるがせた台湾・霧社事件：オビンの伝言』を上梓する。1978年に霧社を再訪問した後、事件の生き残りであるオビン・タダオの元に足繁く通い、事件前後の経過とその背景としての日本植民地支配の暴力、高砂義勇隊と戦争動員の経験、先住民族慰安婦、日本の敗戦と1947年の二・二八事件と白色テロの先住民族への影響、日本人団体「霧社会」との交流などが聞き書かれて完成した集大成である。中村はいつしかオビンを毎年のように訪ねるようになるが、オビンは中村に彼女の経験を話す際、「わたしの胸、単純じゃないのよ、（中略）心が燃えて、苦しくて、話すと怖くなるの」と言ったという。

オビンは霧社事件のことを語るようになり、1996年に日本人30名ほどに話をした翌日に倒れ、数日後に亡くなる。中村は本書の最後を、「倒れるまで語り続けようとした母の物語を、今度はわたしが書こうと、わたしは墓前で誓った」と結んでいる。オビンの死を含めて原稿をいったん書き上げた時、中村は彼女の死を深く実感し、取り乱してしまいすぐに出版できず、いったん原稿を引き出しにしまったという。オビンとは、母と子の関係にまでなっていた中村の深い心情がここに見られる。

本書に結晶したオビンとその周辺の人々への聞き書きの経験は、中村ふじゑを日本の植民統治と戦争の責任問題に対する、応答の実践に強く引き込んだ。『語られなかったアジアの戦後：日本の敗戦・アジアの独立・賠償』、『写真図説 日本の侵略』、『アジアの新聞が報じた自衛隊の海外派兵と永野発言・桜井発言』といった書籍への分担執筆を、1990年代に相次いで行う。2000年前後からは、「日本軍性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷」の開催とリンクして、台湾先住民族「慰安婦」問題について積極的に関わる¹⁶⁾。台湾の元「慰安婦」裁判を支援する会においてたびたび学習会を開き、ニュースレター『FIFTY YEARS OF SILENCE—50年間の沈黙—』に文章を投稿した¹⁷⁾。このような実践の背後に、数十年間に渡る台湾・霧社周辺の人々への詳細な民族誌的な聞き書きが行われていたのだ。

16) 本「法廷」については「戦争と女性への暴力」日本ネットワークのHPを参照。

<http://www1.jca.apc.org/vaww-net-japan/index.html>

17) 台湾の元「慰安婦」裁判を支援する会HPを参照。提訴は2005年に最高裁により棄却された。中村の「日本軍の「慰安婦」にされた台湾の阿媽（あまー）たち」も載せられている。

<http://www.jca.apc.org/taiwan-ianfu-support/>

佐藤愛子

佐藤愛子（1923年生まれ）によるルポルタージュ『スニヨンの一生』（初出1983）は、1974年にモロタイ島で「発見」され、既にこの世を去っていた高砂義勇兵スニヨン（中村輝夫＝史尼育唔＝李光輝）の声を聞こうとし、彼の「戦争」経験と、台湾に帰ってから1979年に亡くなるまでの四年間の経験を想像するものだ。ここで「戦争」に括弧を付すのは、スニヨンにとっていつまでが彼の戦争体験であったか留保せざるを得ないからである。

佐藤は、既に亡くなっていたスニヨンだけではなく、その妻・中村正子＝李蘭英の視点と経験を大事にし記述している。スニヨンが帰ってこず、李蘭英は10年待って外省人の黄金木と再婚した。佐藤はまた、この黄金木の気持ちに思いを寄せた記述を展開する（同上：121-30）。本書は、日本人と台湾先住民族だけでなく、外省人をも描いている。スニヨンの再登場により、黄金木は李蘭英と別れることを余儀なくされたのだ。佐藤は李蘭英にスニヨンのモロタイ経験を聞かすが、李蘭英はただ「（スニヨンは話を）しないです……」とだけ答えている（同上：116）。佐藤はその語りきれない経験を想像する。その想像は漢民族の饒舌な案内人・^{しゅとくせい}皺徳盛がしばしば発する、「蕃社の人はタンジュンね」という言葉と対照的に配置されている（同上：108, 130, 216）。

「彼は何十年も受け身で生きて来た。なぜこんな目に遭わなければならないのだと問いたくても、相手はどこにもいなかった。黙って、ひとりで耐えるほかにどんな方法もなかった。耐えること、それが彼の生きることだった。耐えるのをやめた時、彼は死ぬのだった。それで彼は耐えた。もはや自分が耐えているとは思わないで耐えていたのだろう」（同上：171）。

佐藤は、経験の語りえなさを強調してルポを終えている（同上：208-10）。「たとえば（30年間のモロタイのジャングルの経験を：中村注）語ったところで、それが何だったというのだろう。彼と彼以外のすべての人との間に穿たれている溝が埋まるわけがないことを、彼は知っていたのだ」（同上：215）。

佐藤は台東の李蘭英訪問時に、自分が「日本が彼らに対して犯した罪」を謝罪したと明らかにしている（同上：129）。また、あとがきでは「我々日本人が既に見失ってしまった人間らしさに触れたことが、私のこの作品に対する情熱の根源になった」（同上：221-2）としている。『スニヨンの一生』はスニヨンの体験と、スニヨンを取り巻く人々の思いを理解しようとする稀有のものとなっている。これらの人々の蒙った暴力的な事態や、人々の思いは佐藤に分有されるものとなった。

石橋孝

石橋孝は1924年横浜市生まれで、小学生時代を台湾の澎湖島で過ごした。石橋の『旧植民地の落し子 台湾「高砂義勇兵」は今』（1992）は、主に霧社「タイヤル族」へ

の訪問から、霧社事件、高砂義勇隊、サヨンの鐘について言及している。石橋は在学中、軍隊へ行き、シベリヤ抑留五年の経験を持つ。1988年会社を退職後、台湾の山地を「踏査」した。本書は、「彼ら（「高砂族」）の証言集でもあり、台湾植民地史の上で、支配される側に立った少数民族の「悲しい歴史」でもある（同上：7）。

「第二次大戦の終結は、私たちと台湾を完全に分断し、行きたいにも行く手段、方法がなかったから、終戦後、はじめて台湾を訪れるまでには私の場合、三〇年近くの歳月がかかった。（中略）（霧社事件関係で自分が〔引用者注〕）読んだものは全部、日本人が、日本人としての立場から述べているものばかりで、一〇〇〇人の命を失った「タイヤル族」の主張は、どこにも見当たらない。「霧社事件」から六〇年になろうとしているのを期に、私は長年抱いてきた「霧社事件」に対する疑惑を直接、事件に関わった「タイヤル族」に会って、偽りのない証言を聴くことによって晴らしたいと思った」（同上：47-8）。

石橋は、統治権力は時として、それを「誤って使う」ことがあるとし、「タイヤル族」に対する日本人の「人権無視」を想像する。山地人でモーナ・ルーダオの姪にあたる女性が、警察の追及を事件後に受けた。彼女は埔里の製糖会社に勤める日本人男性の妻で、台中の女学校に通う娘もいた。警察の追及の途中、モーナの姪は二度の自殺を図り、二度目に死んだ。石橋はこの話を、霧社の漢人系台湾人女性から聞いた。その漢人系台湾人女性は、父から聞いた話だと断りながら、警察が「タイヤル族」を処刑する場面の「情景を書くにしのびない」凄惨な状況を、長い時間をかけ話したという（同上：48-52）。石橋は、清流（川中島）の霧社事件「蜂起蕃」の生存者である、アウイヘツパハを訪ねた経験をこう記している。

「アウイは日本の警察のことを話すのをためらう。彼は日本人を殺害していないのだから、彼が、日本人の女、子供を追い廻したぐらいで、日本の警察を恐れる理由は何もない。しかし、現実には彼は、日本の警察を恐れている。戦後四〇年以上も経ち、台湾とは関係もない日本の警察を、彼はどうして怖がっているのだろうか。（中略）／「高さん、あんた、おかしいですよ。いま台湾に、日本の警察はいないのですよ。あなたの心の中にある日本の警察は“幻”ですよ」／「では心配いらないよね。話をしてもいいんだね。でも大丈夫かなあ」／「男らしく話しませんか。あなたは私に昨夜、男らしくないと言ったくせに、……」／それでもアウイは話したそうとしない。／結局、彼が話したのは、別のことだった。／事件中、山の中を放浪しているとき、パーラン社の男の説得で投降し、石川巡査部長の取調べを受けたのは、彼が一五歳のときである。／彼は部長に「自分は絶対に日本人を殺していない」と言ったが、霧社の警察に身柄を送られる。彼は、いちおう上手に切り抜けることができたが、他の同僚のなかには、養蚕用の穴に連れて行かれて処刑された者もいる。彼は、斬殺されたときのダーツという音が、いまでも、耳底に焼きついている。／「どうして我々は、裁判もなしに、簡単に殺されなければならなかったのか」／と、彼は憤慨した」（同上：113-5）。

事件の二年後アウイは川中島駐在所で、午前四時まで警察の執拗な追求を受けた。

「殺してくれ、ボクは日本人を殺っていないのに、あんたたちがそんなにボクを疑うのなら、今すぐ、殺してくれ」／駐在所で、アウイは叫んだ。結果的に彼は釈放されたが、血の凍りそうな恐怖を覚え、家に帰っても数日間、寝たまま起きることができなかった。／終戦後、台湾に日本警察がいなくなっても、彼の脳裏から警察の幻影が消えることはない。そうでなければ、気の強い彼が「日本の警察がこないか」など、どちらかというと、山地人「タイヤル族」の誇り高い「セイダッカ」として、卑屈な態度をとるはずがない（同上：119）18）。

アウイの恐怖は、アウイが1940年に「田中愛二」という日本名となっても続いた。というより統治権力に接した際、恐怖がふと呼びさまされるのである。川中島の青年団長であった彼が、山地の代表として、台北で、総務長官も出席する会に参加したときのことだ。その席で彼は勇敢にも総督府の統治政策批判を述べた。「一視同仁」なのになぜ我々は“蛮人”と呼ばれるのか、それは道理が通らない、霧社事件で裁判もなしに死刑にされた高砂族がたくさんいる、なぜ日本の国の憲法外に高砂族はあるのか、と問いかけたのだ。意外にも同席していた海軍大佐は、「いい質問だ」とほめたが、その翌日、アウイだけが呼び出された。

「あの時はほんとうにギクリときたなあ。霧社事件の後で警察に呼び出しを受け、午前四時まで取り調べをされたときの日を思い浮かべて、長官や大佐はボクを賞めてくれたが、ボクの発言を気にした役人が、ボクを牢屋に閉じ込めてしまうのではないかと、恐怖が先に立って、鳥膚が立ったよ」。実はアウイが呼び出されたのは、彼の正確な日本語に目をつけた総督府の役人が、ラジオ放送に彼を起用しようとしたためであった（同上：120-4）。

石橋は言う。どこに行っても、「種族」が異なっても、「高砂族」は親切だった。日本の山地政策に厳しい不満を唱えても、彼らは酒を勧めて、泊まっていきなさいと言ってくれた。日本人に対してこんなに友好的な民族は、世界のどこを見渡しても他にはいないのではないか、と私は思う。台湾の山地で実際に起こった「人種差別」を知ったときから、意見を日本人に発表するチャンスの少ない彼らに代わり、私は、彼らの声を日本の人にも知ってもらいたいと思った（あとがき）。このように石橋の詳細な記述は出来事と読者をつなぐメディア

18) 石橋はアウイの恐怖を以下のように説明する。石橋は日本に帰ってから、アウイが台湾大学教授に、以下のように告白していたことを知る。「山の中を歩き回っているとき、あまりお腹が空いたので、たまたま横たわっていた日本人の死体から、腿の肉を切り取って、なきながら生のまま齧った。それは、まだ暖かだった」。しかし石橋は彼の告白を信じないという。なぜなら、アウイは「『霧社事件』の戦闘の場面を話すとき、夢中になるあまり『タイヤル族』の一方的な勝利ばかりを話す。一つのことにのめり込んで行くと周囲が見えない。だれかに煽られると、やったことのないことまで、自分がしたような妄想を持つ。アウイは、山地民族が抗日に立ちあがった『霧社事件』の生き残りと讃えられて、つい、そんな言葉を口にしたのではないかと、思いたいが、真実は、彼にしか分からない」（1992: 120）。

アとなり、聞き書きの現在にまで継続する霧社事件の恐怖を描き、霧社の「タイヤル」の体験に内側から迫るものとなっている。

柳本通彦

柳本通彦は1953年生まれフリージャーナリストで、アジアプレス・インターナショナル台湾代表であり、台湾に長く住んできた。柳本はこれまで『台湾・霧社に生きる』（1996）、「悲劇の高砂義勇隊とその妻たち」（2000a）、『台湾先住民・山の女たちの「聖戦」』（2000b）、『台湾・タロコ峡谷の閃光——とある先住民夫婦の太平洋戦争』（2001）を通して、話や生活をともにしてくれた台湾先住民族に対して応答しようとしている。その主題は霧社事件、高砂義勇隊、先住民族「慰安婦」である。邱若竜の中国語による漫画『霧社事件：台湾先住民、日本軍への魂の闘い』（1993）の翻訳も行った。また同じテーマで、「私は日本のために戦った」（NHK教育ETV特集）など数々のドキュメンタリーやニュース映像を作成してきた。

先住民族慰安婦についての証言を掘り起こす作業、柳本によれば、それは「従軍慰安婦」の定義や分類を行うことではない。レッテル張り以前に、まず個々の女たちの声をそのままに、「雛でもかえすように胸で温めてみる」（2000b: 214）ことである。最初の先住民族慰安婦女性との出会いからすでに三年の月日がたつが、この間に二人の女性が亡くなる。彼女らは死ぬ間際まで、柳本に自らの生い立ちを語り続けたという。それは柳本にとって、「わたしという人間を通して、日本人に伝えようとした遺言」（2000b: 236）であったように思える。

2006年の『ノンフィクションの現場を歩く：台湾原住民族と日本』においては、戦争補償問題についてより積極的にこう述べる。軍事郵便貯金については、1994年、当時の120倍という額で義勇隊員らに支払われ、形式上は一応の決着をつけた形になった。

貯金の件はこれで終ったのですが、いまおじいさんたちが求めているのは、日本のために戦った自分たちに何らかの「証し」がほしいということです。戦死した台湾人には日本政府から二百万円の弔慰金を支払いましたが、生きて還った人には何もないのです。だから彼らの気持ちとしては百万円でも五十万円でもいい、あるいは紙切れ一枚でもいい、またはブリキの勲章でもいい、とにかく何らかの「証し」がほしい。そうでないとあのときに自分が命をかけて戦った意味がなくなってしまう、年をとればとるほどに心の整理がつかない気がしてくるのだと思います。（中略）これは歴史認識の問題ではなく、日本人としての道徳の問題だと思います（2006: 56-7）。

柳本の著作が事件の真相を明らかにすることのみならず、被植民者や植民者を問わずひとりひとりにとっての植民地と戦争の経験がいかなるものであったかを描くことにその重点を置いていることは、下山操子（1945年生まれ）の編訳を行った『故国はるか：台湾霧社に残された日本人』（1999）にも明らかである。下山操子の父・下山一は、日本人警官

下山治平と「マレツパ」の頭目の娘「ペッコタウレ」（中村ふじゑの「ピッコ・タウレハ」に同じ）が日本の「政策として」結婚し、その間に生まれている。本書は、戦後も霧社に残り、残らざるをえなかった下山一家の三女・操子から見た歴史であり、そのライフヒストリーである。下山操子は1955年に中華民国に帰化をしており、本書の題名に「日本人」とあることは、読者に「日本」「タイヤル」「台湾先住民」「中国」「台湾」という名詞の意味するものを問い返すものである¹⁹⁾。

4. 終わりに

濃淡の差はあるが、大田君江・中村ふじゑ（中川静子）、佐藤愛子、石橋孝、柳本通彦の各記述に共通するのが、台湾先住民族の蒙った植民暴力の記憶に直面し、直面させられてうろたえながらもそれを記述する姿である。暴力のリアルさに身をそむけることなく、同時に人びとの傷をいくらかでも再度えぐり返していることを気遣いつつ、それらを記述している。野田正彰の言う「聞きとる力」が、ここに登場していよう。そして話を聞き書く中で、著者達は自分が日本人であることと、日本人とは何かという根本的な問題に向き合っている。本稿ではその向き合いとその言語化を「遡行」と呼んできた。中村ふじゑに見られるように、友人として、あるいは「母」として台湾先住民族の記述を行うそのあり方は、日本人を啓蒙したり、糾弾する語り口とは遠い。

多くの日本人が、台湾において台湾先住民族の蒙った植民暴力を聞いてきたはずである。本稿ではできるだけ多くのそうした暴力の記憶を取り上げた。こうした暴力の記憶についての民族誌的記述は、それを読んだ読者をも記憶の分有という事態に巻き込んでいこう。

日本植民主義に対する批判が「悪の糾弾」や「侵略の告発」という語り口でなされる時、暴力の記憶の分有は背景に迫いやられよう。そうした語り口は植民暴力の圧倒性を看過するものであり、何かの手段のために暴力をカードとして利用しているからである。植民主義に対する批判は、暴力の記憶の分有にあり、そのトラウマ的事態を和らげるように再記述（口述）していくことでなされるのではないだろうか。脱植民化（decolonization）はこのように設定されるの

19) 以上のジャーナリストのほか、『「南京大虐殺」のおぼろし』（1973）を執筆した鈴木明の『高砂族に捧げる』（1976）は、1975年に台湾山地を訪問し書かれた、高砂族と日本人の関係性を問題提起するルポルタージュである。本書も植民暴力を分有するものとなっている。鈴木は1929年生まれ、東京放送社員を歴任。戴国輝は本書を、「傷跡は舐める」が「傷跡の由ってくるメカニズム」にはメスを入れることが少なく、鈴木自身の「民族の歴史的立場」が明確でないと批判している（1979: 184-5）。確かに植民統治の歴史に対するある種のあきらめと肯定と、のぞき見趣味に似た「高砂族に対する好奇心」ははっきりと認められ植民主義の分析には欠けているが、同時に鈴木の高砂族の豊富なルポルタージュからは「高砂族」と台湾人の怨念に似た声が聞こえてくる。「日本国民の各位様へ」と題された台湾人陸軍雇員と高砂義勇隊員の手紙の引用などに見られるように、台湾の人々の声を日本人に伝えようとし暴力の記憶を分有している（鈴木 1976 :206-10）。

ではないか。

第二節においては、記憶を聞き書くこと、その中で既存の主体の変化の可能性や、既存の権力関係の転倒の契機について触れた。中村ふじゑがオビンの聞き書きを通じて母と子の関係を感じ取ったことは、「日本人」と「台湾先住民族」（あるいは「タイヤル」「セデック」）という「民族主体間の対話」という構図に収まりきらないものを示している。また複数の記述が、日本人警官とタイヤルの間に生まれた人々を描いている。そのような人々の位置は、単純な「日本人と台湾先住民族」という二項対立の構図には収まらない。

植民暴力の分有の重要なきっかけは、まずもって、「日本人とは何者か」「何をしていたのか」という問い（遡行）にあると言える。これまでに見た台湾先住民族についての民族誌的記述にあって、つまり日本人の遡行において植民暴力の記憶が分有されている。暴力の記憶を分有してしまった者たちは、未来に向けての明確な意図や政治・政策的青写真を持たぬまま、そうした記憶を書かざるを得なかった。暴力を書こうとして書いたわけではなく、出会ってしまった暴力の記憶を背負ってしまい、自らが媒体（メディア）となる中でそうした記憶を書いてきたし、書かされてきたとも言えるのである。

東アジアにおいて力を持つ存在であるマジョリティ日本人にとっては、他者との関係を未来において作っていく上において「日本人とは何者か」という問いが重要だろう。しかし同時に、暴力の記憶はそうように硬く身構えなくとも、台湾先住民族との日常の付き合いの中でふと出会ってしまうものでもある。このことが、以上に見てきた大田君江・中村ふじゑ（中川静子）、石橋孝、柳本通彦の著作から理解される。さまざまな形で出会ってしまった暴力の記憶をすぐさま政治的な主張に利用するのではなく、その暴力の記憶がいかに癒されうるのかを反芻しつつ、自らが分有した暴力の記憶を言葉にし、それらをリアルに描き出している。本稿はそれらを「分有される植民暴力の記憶の民族誌的記述」として概念化した。日本人は台湾先住民族との関係を過去いかに作ってきて、現在いかに作り直そうとしているのか。この問題を分かち合う場は、本稿で見てきた植民暴力の記憶が分有される民族誌記述が、書かれ、読まれ、語られる中で作られるものである。

【参考文献】

- アウイヘッパハ述・許介麟・林光明解説(1985),『証言 霧社事件——台湾山地人の抗日蜂起』東京:草風館
- 池田土郎(2004),「元高砂義勇隊マヤウ・カッテの戦争の記憶」山本春樹、黄智慧、パスヤ・ポイツォヌ、下村作次郎編『台湾原住民族の現在』東京:草風館、175-185頁
- 石橋孝(1992),『旧植民地の落し子 台湾「高砂義勇兵」は今』東京:創思社
- 磯村生得(1981),『われに帰る祖国なく 或る台湾人軍属の記録』時事通信社 (1998新装版)
- 伊藤孝司(1995),『棄てられた皇軍:朝鮮・台湾の軍人・軍属たち』東京:影書房
- 大田君江・中川静子(1969),「霧社を訪ねて」『中国』69 (特集——台湾高山族の反乱<霧社事件>) (抜粋されて戴編1981にも所収)
- 岡真理(2000a),『記憶/物語』東京:岩波書店
- (2000b),『彼女の「正しい」名前とは何か:第三世界フェミニズムの思想』東京:青土社
- 加藤邦彦(1979),『一視同仁の果て 台湾人元軍属の境遇』東京:勁草書房
- 門脇朝秀 (あけぼの会) 編(1994),『台湾高砂義勇隊:その心には今もなお日本が、、、五十年後の証言 (祖国はるか5) 』松戸:あけぼの会
- 河崎真澄(2003),『還ってきた台湾人日本兵』東京:文芸春秋
- 河上丈太郎・河野密(1931),「霧社事件の真相を語る」『改造』13: 121-132、3月号
- 北村嘉恵(2008),『日本植民地下の台湾先住民教育史』札幌:北海道大学出版会
- 木村宏一郎(2001),『忘れられた戦争責任 カーニバル島事件と台湾人軍属』東京:青木書店
- 邱若竜(1993),『霧社事件:台湾先住民、日本軍への魂の闘い タイヤル族』江淑秀、柳本通彦訳、東京:現代書館
- 河野密(1931),「霧社事件の真相を究ぐ」『中央公論』46(3): 342-352、3月号
- 早乙女勝元編(1996),『台湾からの手紙:霧社事件・サヨンの旅から』東京:草の根出版会
- 佐藤愛子(1984),『スニヨンの一生』文芸春秋、1987文春文庫 (初出は1983『オール読物』)
- 下山操子著・柳本通彦編訳(1999),『故国はるか:台湾霧社に残された日本人』東京:草風館
- 鈴木明(1974a),「台湾のいちばん長い日」『証言 中国・台湾・沖縄:政治とマスコミの空白を追って』 (初出1972『文芸春秋』12月号)、65-130頁、東京:光風社書店
- (1974b),「台湾の『生きている皇軍』」『証言 中国・台湾・沖縄:政治とマスコミの空白を追って』 (初出1974『文芸春秋』3月号、大幅に加筆)、131-173頁、東京:光風社書店
- (1976),『高砂族に捧げる』中央公論社 (1980中公文庫)
- (1977),『続・誰も書かなかった台湾:天皇が見た“旧帝国”はいま』東京:サンケイ出版

- 戴國輝(1979),『台湾と台湾人 アイデンティティを求めて』東京：研文出版
- _____ (1981),「霧社蜂起事件の概要と研究の今日的意味——台湾先住民族が問いかけるもの」戴國輝編『台湾霧社蜂起事件：研究と資料』13-46頁、東京：社会思想社（初出は1973『思想』2月号）
- 台湾人元日本兵士の補償問題を考える会編(1993),『台湾・補償・痛恨』（台湾人元日本兵戦死傷補償問題資料集合冊）
- 高木健一(2001),『今なぜ戦後補償か』東京：講談社
- 高橋哲哉(1999),『戦後責任論』東京：講談社
- _____ (2001),『歴史／修正主義』東京：岩波書店
- 高山輝男（郭幸裕）(1985),『「天皇の赤子」たちは、いま』東京：アス出版
- 土橋和典(1994),『忠烈拔群・台湾 高砂義勇兵の奮戦』東京：戦誌刊行会
- 鄧相揚(2000a),『抗日霧社事件の歴史——日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』下村作次郎、魚住悦子訳、大阪：日本機関紙出版センター
- _____ (2000b),『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族たち』下村作次郎、魚住悦子訳、大阪：日本機関紙出版センター
- _____ (2001),『抗日霧社事件をめぐる人々——翻弄された台湾原住民の戦前、戦後』下村作次郎、魚住悦子訳、大阪：日本機関紙出版センター
- 富山一郎(2002),『暴力の予感：伊波普猷における危機の問題』東京：岩波書店
- 中川浩一、和歌森民男編(1980),『霧社事件：台湾高砂族の蜂起』東京：三省堂
- 中川静子(1970),『日本帝国主義下の台湾 霧社事件（日中講座第八集）』日中友好協会（正統）永福支部編集発行パンフレット
- _____（中村ふじゑ）「ピホワリスの墓碑銘——高永清さんを偲んで」『台湾近現代史研究』5（1993年緑陰書房より復刻）
- 永野慎一郎、近藤正臣編(1999),『日本の戦後賠償：アジア経済協力の出発』東京：勁草書房
- 中野敏男(2001),「<戦後>を問うということ：「責任」への問い、「主体」への問い」『現代思想（戦後東アジアとアメリカの存在）』7月臨時増刊号、29(9): 291-309
- 中村平(2007),「「困難な私たち」への遡行：^{そこ}接触領域^{コンタクト・ゾーン}における暴力の記憶の民族誌記述」『Contact Zone コンタクト・ゾーン』（京都大学人文科学研究所）1: 143-160
- 中村ふじゑ(1981)「霧社抗日蜂起から五十年」『思想の科学』127
- _____ (1994),「阿里山麓のツォウ族の村を訪ねて」（上・下）『中国研究月報』（中国研究所）552, 553
- _____ (2000),『教科書に書かれなかった戦争 Part32 タイヤルの森をゆるがせた台湾・霧社事件：オビンの伝言』東京：梨の木社

- 中村勝(2003),『台湾高地先住民の歴史人類学：清朝・日帝初期統治政策の研究』東京：緑蔭書房
- _____(2006),『「愛国」と「他者」：台湾高地先住民の歴史人類学Ⅱ』東京：ヨベル
- 中村勝・洪金珠著、綢仔絲萊渥口述1997『山深情遙：泰雅族女性綢仔絲萊渥の一生』（山深く情は揺れる：タイヤル女性チュフス・ラフの一生）台北：時報出版（中国語）
- ねず・まし(1970),「台湾霧社の蜂起」『日本現代史 7』東京：三一書房、69-85頁、307頁
- _____(1997),「付 霧社事件の真相」『現代史の断面・戦時下の朝鮮・台湾』東京：校倉書房、88-90頁
- 野田正彰(1998),『戦争と罪責』東京：岩波書店
- 朴慶植(1971),「霧社事件」歴史学研究会編『太平洋戦争史Ⅰ 満州事変』青木書店、214-215頁
- 浜崎紘一(2000),『俺は日本兵 台湾人・簡茂松の「祖国」』東京：新潮社
- 林えいだい(1994),『台湾第五回高砂義勇隊：名簿・軍事貯金・日本人証言』北九州：北九州中国書店
- _____(1998),『証言 台湾高砂義勇隊』東京：草風館
- _____(2000),『台湾の大和魂』大阪：東方出版
- _____(2002),『台湾秘話 霧社の反乱・民衆側の証言』東京：新評論
- 林えいだい編(1995),『写真記録台湾植民地統治史：山地原住民と霧社事件・高砂義勇隊』福岡：梓書院
- ピホワリス（高永清）(1988),『霧社緋桜の狂い咲き——虐殺事件生き残りの証言』加藤編訳、教文館
- 福永美知子(1995),『心果つるまで 日本に戦犯にさせられた四人の台湾のお友だち』姫路：水晶工房(2002『心果つるまで 日本に戦犯にされた四人の台湾のお友だち』東京：文芸社として復刻)
- ^{フチイ} 傅琪貽(2006),「台湾原住民族における植民地化と脱植民地化」倉沢愛子、杉原達、成田竜一、テッサ・モーリス・スズキ、油井大三郎、吉田裕編『岩波講座アジア・太平洋戦争4 帝国の戦争経験』東京：岩波書店、267-291頁
- 宮本延人他八名談(1954),「高砂族の統治をめぐる座談会」『季刊民族学研究』18(1,2)
- 港道隆(1994),「責任の言語、他者のエクリチュール」新田義弘他編『岩波講座現代思想 2 20世紀知識社会の構図』東京：岩波書店、243-276頁
- モートン、スティーブン(2005),『ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク』本橋哲也訳、東京：青土社（Stephen Morton. 2003. *Gayatri Chakravorty Spivak*. London: Routledge）
- 基佐江里編(1986),『旧台湾出身日本兵秘録 聞け！血涙の叫び』東京：おりじん書房（旧日

本軍人軍属遺族救助基金会支援委員会出版局)

柳本通彦(1996),『台湾・霧社に生きる』東京：現代書館

_____(2000a),「悲劇の高砂義勇隊とその妻たち——日本の植民地支配に翻弄された台湾先住民」アジアプレス・インターナショナル編『アジアの傷 アジアの癒し』143-169頁、名古屋：風媒社

_____(2000b),『台湾先住民・山の女たちの「聖戦」』東京：現代書館

_____(2001),『台湾・タロコ峡谷の閃光——とある先住民夫婦の太平洋戦争』東京：現代書館

_____(2006),『ノンフィクションの現場を歩く：台湾原住民族と日本（かわさき市民アカデミー講座ブックレットNo.24）』川崎市生涯学習財団かわさき市民アカデミー出版部

山路勝彦(2002),「高砂義勇隊と心のなかの日本」『台湾原住民族研究』6

山辺健太郎(1971),「霧社事件」『現代史史料22 台湾2』みすず書房

李憲章(1995),「戦後の悲劇を他人事のように眺めてきた日本国の責任は、どこまでも重い」戦後補償国際フォーラム'94実行委員会代表 高木健一編『もう待てない 今こそ戦後補償を!』、134頁、東京：凱風社

廖木全(1992),「生死を共にした私たちへの差別」国際フォーラム実行委員会編『戦後補償を考える』19-23頁、大阪：東方出版

林景明(1970),『知られざる台湾——台湾独立運動家の叫び』三省堂

_____(1973),『台湾処分と日本人：脱走兵と連合赤軍』旺史社

_____(1997),『日本統治下台湾の「皇民化」教育』東京：高文研

林水木『戦犯に囚われた植民地兵の叫び』自家版

Clifford, J. 1997. *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge, MA: Harvard University Press (2002『ルーツ——20世紀後期の旅と翻訳』毛利嘉孝ほか訳、東京：月曜社)

Siyac Nabu口述・Walis Ukan訳注(2001),”Niqa ka dheran uka ka Sediq: Pccebu Sediq ka dTanah Tunux、非人的境遇——賽德克族看霧社事件”(非人の境遇——セデック族が霧社事件を見る)、Yabu Syat・許世階・施正峰編『霧社事件：台湾人の集体記憶』（霧社事件：台湾人の集団記憶）、19-69頁、台北：前衛出版

要 旨

Bun-yuu of Memories of Colonial Violence
-Ethnographic Writing of Taiwanese Indigenous Peoples by Japanese
Journalists-

I, Japanese, have been meeting with Taiwanese Indigenous peoples, mainly Tayal people, through anthropological fieldwork. I have been meeting and listening to a lot of their memories of colonial and postcolonial Taiwan including happy, nostalgic and violent one. Japanese colonized and ruled Taiwan for fifty years (1895-1945), and brought about many violent events and memories in the colonial modernization project. One of the important problems is how Japanese, past colonizer face and listen to those events and memories now. And it is related to the problem of taking responsibility of colonial rule and war.

Bun-yuu might be translated to “part-sharing” or “possession,” meaning the situation that events or memories occupy person (OKA 2000). This paper recognizes *bun-yuu* of memories of colonial violence is highly related to taking responsibility of colonial violence.

Post WWII Japanese mainstream society’s attitude to colonial history and the colonized people basically is “forgetting” in the background of capitalist economic development. Some Japanese who engaged colonial rule among Taiwanese indigenous peoples or lived in Taiwan strongly justified colonial policy. In this situation, some Japanese journalists till now have been exploring what Japanese have been doing in colonial Taiwan, including violent events and memories among indigenous peoples. Their texts have been challenging and even resisting the major Japanese attitude toward colonial violence and its memories, as a result.

Those texts are written by Japanese journalists including NAKAGAWA Shizuko (NAKAMURA Hujie) (1934-), SATO Aiko (1923-), ISHIBASHI Takashi (1924-), YANAGIMOTO Michihiko (1953-). There is a question on “what and who Japanese is and what they have done” throughout those texts and this is the critical question when East Asian capitalistic majority Japanese make relationship with Asian others in future. But at the same time violent memories sometimes are what happen to “advent” (or, come) to people in

everyday conversations unintentionally, not only in formal, highly political situations. Above texts show this.

This paper conceptualizes those texts as “ethnographic writings which perform *bun-yuu* of memories of colonial violence,” and tries to create a decolonial space where “we” (including readers) can share how Japanese have been shaping and reshaping the relationship with Taiwanese indigenous peoples until present, for the undecided future.

キーワード ; Taiwan, Indigenous People, Japanese Colonialism,
Decolonization, Violence, Memory, Journalist, Ethnographic
Writing, Responsibility, Minzoku Subject

투 고 : 2008. 8. 31
1차 심사 : 2008. 9. 12
2차 심사 : 2008. 9. 27